

えー、しばらくのあいだおつきあいを願います。

一声（ひとこえ）と三声（みこえ）は呼ばぬ玉子売り。

おもしろい川柳が言うてございます。玉子屋さんの売り声と申しますのは、

「たま〜ご〜、たまご」

と、ふた声にかぎったもんやそうでございます。それにはわけがございまして、一声で、

「たま〜ご〜〜」

と申しますと、

「どーれー」

と応対したくなりますし、三声で、

「たまごたまごたまご……たまごたまごたまご」

と申しまして、うしろから誰かが追いかけてくるのかな、という感じで具合がわるい。やはり、

「たま〜ご〜、たまご」

と、ふた声にかぎったもんやそうでございます。

でも、最近はお店をかまえた玉子屋さんでさえ少のうなつてまいりました。ましてや、玉子をかついで売りに歩いてなおかたはほとんどいてはらへんのやないかと思えます。

「なんとかならんかなあ……なんともならんわなあ……」

「たま〜ご〜、たまご。たま〜ご〜、たまご」

「最後の最後までがんばってみたけど、こればかりは人間の力ではどうにもならん。あきらめるしかないのんかなあ……」

「たま〜ご〜、たまご。たま〜ご〜、たまご」

「なんや、あれ。たまごごと、たまごゆうとんな。こんな夜遅うに、玉子売ってあるいてんのかいな。酔狂なやつちゃで」

「たまごごと、たまご。たまごごと、たまご」

「だんだん近づいてくるで。ここは海岸やから、このあたりにほかに家はなし。うちに売りに来る気いかな」

「たまごごと、たまご」

「うわ、玄関のまえでとまりよった。このくそ忙しいのに、かなんなあ」

ぴんぽーん、ぴんぽーん。

「夜分遅うにすんまへん。〈毛駄山生物学研究所〉はんですか」
「そや。なんやねん、今時分」

「玉子いりまへんか」

「いるかいな、そんなもん。スーパー行ったらなんぼでも売ってるがな」

「けっしてお金はいただきまへん」

「ほな、ただかいな」

「ただでおます」

「ただの玉子なんか気色悪うて、よけいにもらう気せえへんな」

「あのね、この玉子はただの玉子やおまへんで」

「今、ただて言うたやないか」

「ただやけど、ただの玉子やおまへんねん」

「ややこしいな。とにかく、いらんいらん。帰ってくれ」

「そうおつしやらんと。この玉子、あんたに必要なもんでつせ」

「しゃあから、スーパー行ったら買えるて……」

「そんな玉子と玉子がちがいます。見ていただいたらわかりまんねん。ちよつと、ここをおあけください」

「あけられへん、あけられへん」

「おあけくださらねば、戸のすきまより」

「うわっ、だ、誰やおまえ」

「どうもはじめまして」

「どこから入って来たんや」

「戸のすきまから」

「嘘つけ。戸はぴしゃつとしめたあるで」

「そんなことより、玉子、買うてください」

「いらんちゅうとんねん。おまえ、けつたйнаかつこうしとるな。フリフリの服着て、往年のキャンディーズみたいやないか」

「私、伊藤卵といいまんねん」

「男のくせに変な名前やな」

「ま、この玉子見とくなはれ」

「ふーん、きれいな玉子やな。でも、一個だけかい」

「そうです。ええ色つやしてまっしやろ」

「でも、これ、にわとりの玉子やないな。なんの玉子や」

「これは、『時たまご』です」

「溶き卵？ 溶いてあるどころか、殻を割ってもないがな」

「溶き卵やおまへん。『時たまご』……時をかける玉子です」

「あほなこと言うな。SFの読み過ぎで頭おかしなつとるんちゃうか」

「最近SFを読み過ぎる人なんかほとんどいてまへんで。

あんたのために持つてきたんです。もろたつとくなはれ」

「わしのために？ ええかげんなこと言うな」

「ほんまですて。あんた、毛駄山はんですやろ」

「そや。わしがこの〈毛駄山生物学研究所〉の所長、毛駄山ちゃん太郎や」

「けつたйна名前ですな」

「伊藤卵よりましや」

「その毛駄山はんにぴつたりの玉子ですねん」

「どうぴつたりやねん」

「まあ、持っていたいただいたらわかんと思います。手にとつてみとくなはれ」

「これをか……ふーん、なんとう、懐かしい感じのする玉子やな。あつ、あれ？ あれ？ どないなつとんねん。まわりの景色が溶けていくで。目がぐるぐる回るがな。うわあああ
あつ」

「毛駄山はん、毛駄山はん、気いつきましたか」

「わ、わしはどないなつたんや」

『時たまご』の力で時空を超えましたんや」

「また、そんなでたらめを……ああつ、わ、わしの服がない。裸やがな。こら、おまえ、わしの服どこやったんじゃ」

「そう言うたら、あんた、すつぽんぽんですな。たぶん、時空を超えたときの衝撃で服が溶けたんでつしやる」

「溶けたんでつしやるて……誰か来たらどないすんねん」

「あわてないあわてない。ひとやすみひとやすみ」

「おまえは一休さんか。どわーつ、向こうから立派な馬車に乗った連中が来よつたがな。どないしょ、どないしょ」

「ありや？ あれはどう見ても西洋の馬車ですなあ。ベルサイユの薔薇とかに出てくるような。おかしいなあ……ちよつと行き場所をまちごうたんかもしれんなあ。こんなとこに来るつもりやなかったんだ」

「アホかつ。どないすんねんどないすんねん」

「心配いりまへん。また別の時空にジャンプしたらええだけだ。ここが何の世界か確かめてくるあいだ、そこに川がおまつしやる。その川にでも入ってなはれ。さて、と……申しあげます、申しあげますつ」

「なんじゃ、貴様は」

「たいへんでございます。わがあるじのカラザ侯爵さまが、川遊びをしておられるとき、盗賊がまいりまして、カラザ侯爵さまの衣服や持ちものをすっかり盗んでしまいました」

「なんと、王さまに申しあげるゆえ、しばらく待っておれ」

「王さまとおっしゃいますと」

「この地方をおさめる卯王さまじゃ。わしはその家来の伯爵で卯伯と申す」

「ははあ……長靴をはいた猫の世界に来てしもたらしいな。そうとわかったらここに用はない。カラザ侯爵……やのうて、毛駄山はん、こっち来なはれ。さあ、『時たまご』を持ちなはれ。行きまっせえ」

「うわーっ、またや。また、景色が溶けてるー。目が回るー」

「毛駄山はん、毛駄山はん、氣いつきましたか」

「わ、わしはどないなったんや」

『時たまご』の力でまたまた時空を超えましたんや」

「今度はちゃんとした場所に着いたんやろな」

「それはわかりまへん。調べてみんなことには。おっ、あっちから侍みたいなかつこうしたやつが来ましたで」

「そのものども、怪しいやつじゃ。ひつとらえて打ち首にしてくれる」

「毛駄山はんは黙ってておくなはれ。わてが応対しまっさ。

えーと、いえいえ、我々は決して怪しいもんではございません」

「海岸で素っ裸でおるやつの、どこが怪しいもんではないんじゃない」

「すみません、ここはどこですか」

「どこて……ここは、玉子掛御藩じゃ。拙者は、当藩の家老、時田孫太夫と申す。うわっはっはっはっはっは」

「うわー、またまちごうてしもたわ。江戸時代やがな。毛駄山はん、行きましょか」

「こらあ待て待て待て。なにが行きましょか、だ。勝手に動くな。城へ連れてかえって、じっくり取り調べてやる。

こっちへ来い。その玉子も怪しいな。わしに寄こせ」

「この玉子は大事な『時たまご』なんや」

「じゃかあしい、寄こせ。あつ、玉子がないっ」

「そう『あつ、玉子、なし』に言われたら、渡せるもんも渡せ

んわ」

「毛駄山はん、よう言いなはった。それでこそ〈毛駄山生物学研究所〉の所長や」

「貴様ら、何を申しておる。こうなったらこの場で一刀のもとに切り捨ててくれるわ。拙者は、剣をとっては柳生新陰流の使い手。また、杉田卯白先生について卯学も学んだぞ。かんら殻殻殻……」

「どうせ殻いばりやろ」

「なんだと、ちよこさいな。貴様、ぎたぎたのぐだぐだのぐちゃぐちゃのずたずたにしてやるっ」

「エツグ」

「毛駄山はん、アホなこと言うてんと、逃げまっせ。さあ、『時たまご』を持って。行くでえー」

「どわわわ、またまた目が回る地面が回る空が回る地球が回る」

「毛駄山はん、毛駄山はん、氣いつきましたか」

「わ、わしはどないなったんや」

「『時たまご』の力でまたまたまた時空を超えましたんや」

「今度はちゃんとした場所に着いたんやろな……て、お、おい、あそこに見えるのは新潟やろ。ということは、ここはもとの研究所のある海岸やないか」

「そうです」

「また失敗、ゆうことか」

「成功です。ここはたしかに〈毛駄山生物学研究所〉のある海岸ですけど、よう見てみなはれ。ちよつとちがいますやろ」

「そう言われても、どこがどうちがうのか……あ、わかった。海がえらいきれいやないか。海岸にもゴミが落ちてない」

「そうですねん。ここは、毛駄山はんが子供の頃に見た海岸……戦前の海岸です」

「そうやったんか、どうりで懐かしい光景や思たわ……」

「ようやくうまいこといった。これでわての用事は終わりで

す。わての用事は、毛駄山はんにその玉子を正しい形で渡すことでしたさかい」

「どういうこつちや。でも、この玉子……どこかで見たことあるなあ」

「珍しいもんでつせ。しゃあけど、この時代やったら、珍しいことあらへん。なんぼでもおましたんや。そこの木のうえを見てみなはれ」

「木のうえ……？ あつ、巢がある。あれは、朱鷺の巢やがな。懐かしなあ、昔は朱鷺がこのあたりになんぼでもおったんや。わしはそれを覚えてて、なんとか日本の朱鷺をこの佐渡島にもういっぺんよみがえらせよう思て、研究所まで建てて今日まで努力してきたんやが……」

「もう、わかりましたやろ。その玉子がほんまは何の玉子か」「ああ、やっとわかった。今から、現代に戻って、この玉子をきちんと孵化させる。この島がまたあの美しい鳥でいっぱいになる日がきつと来るわ」

『朱鷺たまご』、お時間でございます。

(了)